



TITLE:

<批評・紹介> 東亞考古學會「萬安北沙城」/ 小野勝年・日比野丈夫共著「蒙疆考古記」

AUTHOR(S):

藤枝, 晃

---

CITATION:

藤枝, 晃. <批評・紹介> 東亞考古學會「萬安北沙城」/ 小野勝年・日比野丈夫共著「蒙疆考古記」. 東洋史研究 1948, 10(2): 130-134

ISSUE DATE:

1948-05-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138872>

RIGHT:

小野勝年、日比野丈夫共著

# 蒙疆考古記

昭和二十一年十月、京都、學藝社 星野書店刊  
A5判、扉繪、圖版七四頁、本文三三九頁、  
價七五圓

内長城線と外長城線とにかこまれた、山西の北と察哈爾の南の地域、いひかへれば一昨年までそこにあつた政府が「宣化省」・「大同省」と呼んでゐた地域。そこは、二つの長城の築かれてゐる岨々たる山脈が自然の境界を形づくつて、東西に長い槽狀の盆地となつて横たはり、その中央を、永定河とそれに注ぐ洋河・桑乾河などの流れが潤はしてゐる。北平から包頭に向ふ鐵道線路はそれらの河に沿つて大同まで進み、そこから北に折れて蒙古の高原に抜け出る。その間の車窓から眺めると、五月にも雪をいたゞく峰を混へた山なみをはるか南に望み、すぐ手前には、白く光る河の流れに沿つて亭々とそびえる楊柳が點綴しとところどころに片流れの泥屋根をふいた農家をかこんでさゝやかな壁をめぐらせた村落が聳まれ、數里ごとに、巨大な城壁をかまへた縣城のほとりの驛に汽車がとまる。かう言つた景觀が東の端の居庸關から西の端の大同まで殆んど一様である。さういふ河の北岸の至るところに、こゝに紹介しようとする様な古墳がきづかれてある。

この地域は北にかたよつて冬の寒氣のきびしい半沙漠であるにも拘らず、河に近くて灌漑の便のある所は、農産は意外に豊

東亞考古學會

## 萬安北沙城

蒙疆萬安縣北沙城及び懷安漢墓

東方考古學叢刊第五冊、昭和二十一年十二月、  
東京、座右寶刊、B5判、一二〇頁、圖版七三、  
佛文概要一六頁、價一八〇圓

かで、盆地の全人口を養つてなほ餘りがある。いまでは外長城のはるか北方まで漢人農耕地は進出してゐるけれども、ごく近年までは、かなり長期のあひだ、こゝが耕作地域——漢人居住地——の北の限界であつた。行政上は、前清時代に山西省と直隸省とに屬してゐたが、その前には東の半分も山西省に屬し、その言葉や風習も山西色が極めて濃厚である。そして、たいていの村の農民は、その何代か前の先祖が山西の洪洞縣から移住して來たのだ、との言ひつたへをもつてゐる。明から清にかけて、邊防の要地として、人爲的に人口の充實が行はれたものであるらしい。明朝吏を特色づける「北虜」の侵入を防ぐため、こゝに設けられた宣化・大同の二鎮は、當時、格別に重要視せられてゐたのである。だが、この地域は、この時はじめて拓かれたものではなく、こゝの都會の多くは遼金時代に開かれたといふ經歷をもつてゐる。燕都の固めとして、また、西北・西南両面の邊境に對する足場として、北族の統治の下に漢人による開拓が行はれたのである。北にかたよつて國をたてた兩朝の下にあつては、中原に都した諸朝の下にあるのと比べて、この地域の占めてゐた地位はすこぶる事情を異にする。これに先だつ數世紀の間は、漢人と北族との間にしばしばこゝの爭奪戦がくりかへされたが、概して北族の勢力が優勢であつた。この地區第一の都會である大同と、世に隠れもないその西の石佛とは、この間にあつて、北魏朝をたてた拓跋族の残したモニュメントである。ところが、それより前は、かなりの期間にわたつて漢

人がこゝを支配してゐた。すなはち、戰國時代に晋・趙兩國の勢が、いはゆる綏遠銅器をのこした北族を逐つて、いまの内長城の線を越えて北に及び、それがさらに秦・漢にうけつがれて、いくつかの郡縣がこゝに設けられた。一九二三年に渾源縣の李峪村より出土した戰國式銅器とそれに伴ふ諸種の遺物が、そこまで浸潤してゐた當時の漢文化の水準を示すものとして如何に世の視聽をあつめたかは、あらためて申すまでもないことであらう。その後、江上波夫、水野清一氏らがこの地方を旅行して、この時期を特色づける黝色土器の埋つてゐる多くの遺跡を『内蒙古・長城地帯』の中に報告した。また、七・七事變間近のころ、張維華氏が懷安の漢墓出土の遺物の紹介を行なつたことがあつた（『禹貢半月刊』七ノ五・六）。けれども、それまでは、まだ、この地域で組織だつた發掘が行はれたことはなかつた。

七・七事變の起つた翌年の昭和十三年に、城大の調査隊の蔚縣古城址の踏査が行はれた。またその年に、水野清一氏らの雲岡石佛の考古學的調査が始められて、これが七年間つゞけられた。これと並行して、同氏やその他の諸氏によつてこの地區に散在する漢代遺跡の調査も數回に亘つて行はれた。すでに諸雜誌にのせられた通信や豫報によつて、その經過は一應知られてゐる所であるが、そのあらましをこゝにくり返すと、まづ昭和十五年に萬安縣の漢墓の豫備調査、翌十六年にその發掘と、以前の出土品の調査、十七年には水野氏のほか、長廣敏雄、小野

勝年、日比野丈夫その他の諸氏による陽高縣古城堡の漢墓の發掘、十八年にはその補足調査、十九年には古城堡の再度の發掘が行はれた。

こゝに紹介する二冊の報告書は、一つは十六年の萬安縣北沙城（懷安縣と萬全縣とが合併して萬安縣となつたのであるが、こゝはもと萬全縣に屬してゐた）の漢墓の發掘とそこの土城址の調査、並びにさきに張維華氏の報告した懷安漢墓の出土品の調査の正式の報告書で、執筆者は、第一部の『北沙城漢墓』は水野清一、岡崎勇一兩氏、第二部の『懷安漢墓』は水野氏である。もう一つの方は、十七年の陽高の漢墓發掘に従事した『五臺山』の共著者らの現場の日記にもとづく詳細な豫報であるが、この發掘については、その翌年に『蒙疆に於ける最近の考古學的發見』と題する水野清一、日比野丈夫兩氏の講演速記の略報告が出版せられてゐるから、御承知の方も多いと思ふ。

いまゝで考古學的調査の行はれた漢代の古墳といへば、樂浪のものゝ外には南滿、佛印、外蒙にあるものが調査せられてゐるにすぎぬ。古墳以外の遺物遺跡も、さういろいろあるわけではないのだから、これら數基の古墳が漢代の漢人のものであるといふことがすでに大きな驚異に値ひすることである。しかも、樂浪・佛印の様な漢文化の中心の地方からはるかに離れたところで、どれだけ本地の制を傳へてゐるか、といふ點には、いまゝでも一應の疑問がもたれてゐたのであるから、これがやはり邊境であると言ひながら、中原からあまり隔たりのない

地方にあることは重視せねばならぬ。だが、何よりも喜ぶべきは、土質の關係で、樂浪の古墳は内部が水におかされてゐるのに對して、こちらは殘存狀態が極めて良かったといふことである。とくに陽高の方は、木槨が壞れずに残つてゐて、棺も副葬品もそっくり残つて居り、葬られた人もミイラとなつて残つてゐた。従つて、これら發掘の注目すべき所以を説かうとすると、墓制そのものから、おびたぐしい出土品の一々に及ばねばならないことゝなるけれども、こゝではさうするわけにも行かぬから、見當外れになるかも知れないが、發掘の結果の一通りの概要だけを述べよう。

北沙城の古墳は、萬安縣にほど近く東洋河と西洋河とが南洋河に流れ入る合流點の北岸に十數基散在し、そのうち、このときは五、六、七號の三つが發掘せられた。元來は方墳であつたものらしく、その封土の高さは三—六メートル、六、七號の二墳は地表下五、六メートルの所に壓し潰された墓室が掘り出された。五號墳は遂に墓室は發見せられないで、墳墓を作る前からあつた奇妙なさしわたし二メートル以下のたて、あな、の址が、封土の下からも外側からも、合せて二十近くも發見せられた。水野氏はこれを穀物を貯へるあな、の址と推定し、以て本誌七卷二・三號に『漢代あなぐら考』をものされた。ところが、同じ發掘の協力者である小野氏はこれをあな、ぐらと解することには反對ださうである（本誌八卷一號、五三頁）。數日前にちやうど京都にあらはれた小野氏にこのことを質したら、あな、ぐら

とみるには容積が小さすぎる。さりとて、では、何のためのものかと言はれても、さしあたつて自分の考へはない。誰かよい考へを出してほしい、とのことであつた。

陽高の古墳は、縣城から日本里で九里ばかり南の、桑乾河の北岸、古城堡といふ村にあり、その数はすべて九十九近くある。十七年秋には、そのうち十二號、十五號、十七號の三基が發掘せられた。三つのうちで十七號墳（魯相墓）はさしわたし三十五メートルにもあつて全體の中でもつとも大きなもの、三つの中でもつとも小さい十二號墳のそれは十五メートルほどである。そして、それらは、いづれも墓室が地表下十メートルを越す深い所にあり、これは發掘者たちの豫想してゐなかつた所なので、作業は困難であつた模様で、その苦心焦慮の狀が、村のいろいろな出来事と一所に、縷々と語られてある。遠慮のない言ひ方をするが、この邊はもう少し簡略に書いてもらつた方が、讀む身には有難かつた。だが、後半の、墓室が開かれてから後は、筆は俄かに生き生きとして来る。以下、墓制、遺物について北沙城、懷安のものも併せてこゝに述べよう。

墓室の木槨は、角材を縦積みにしたのも、横積みにしたのももあり、長い方の一邊が五―七メートルの長方形であるが、十五號墳は、地下十メートル餘りの所に横穴を作つて墓室が作られてある點で、他と制式を異にする。その長方形は、普通には、長い方の邊が東西向きになり、西北の隅に一對の棺が東を枕しておかれる。男の棺は北側になる。十七號では棺が乾漆

づくりであつた。これはいまままでに類例をみない。遺骸は、こもまたはふとんでまき、錢をしきつめてある。十七號では脚を組んで葬られてゐることが奇妙である。十二號（耿氏墓）の北棺には木偶が収められ、また蚕がいれられてあつた。含玉の類のほかに、澤山の玉片をはめこんだ様子の變つた箱が、潰骸の頭にかぶせてあつたことなども従前にさういふ例が全く知られぬ所である。

棺の東、あるひは南のところには、さまざまの副葬品が陳べられる。

銅器類は東側または東南に一列に陳べるのがしきたりの様である。種類は鐘、鼎、鈇、香爐、鏹斗などである。北沙城六號墳の鳳が翼をひろげた形を臺にした博山香爐は甚だ風變りである。古城堡十七號墳から出て來た戈は、柄も鞘もそろつてゐたことは、從來の知見をさらに進めるものである。北沙城六號墓の場合、一般に鼎と墓とが前漢に多く後漢に少いことから、出土の銅器の種類が、この墓を前漢末期のものとして推定する重要な論據となつてゐる。

銅器よりも注意をひかれるのは漆器である。漆器は棺のすぐ東におかれたものゝ様である。土中にある間に壞れたものが多かつたけれども、懷安のものゝうち一揃ひの化粧匣はもつとも保存狀態がよく、その流雲紋のところどころにあらはされた鳥獸や人の圖柄は、見てゐて興味が盡きない。懷安からも、古城堡十二、十七號からも鏡奩が出た。ともに壞れてはゐるが、原

形は推測し得る。ことに後者には、そのそばこがあり、また鏡や化粧道具を納めたまゝの状態で出た。道具の中には（懷安の方にも）櫛とかその外の竹製品がいくつもある。竹は北方に産しないのだから、これは中原から傳はつたものでなければならぬ。壊れてはゐるが、陽高十二號墓の漆盃の幾何學模様も興深いものである。

次に注目すべきものに墓鎮がある。半メートルばかりの方形の大石製または漆器の臺の四隅に、鐵、金銅、または貝と銅とで細工した置物をのせたものである。北沙城の方は鐵製で、何の形がよく判らぬが、陽高の十二號、十七號は羊の形をしてゐる。

土器類は、副葬品として墓室の中に納められたものと、封土の中にまぎれこんでゐたり、水はけのために木槨の外にしかれた破片、北沙城の土城址のものを數へ得る。北沙城のものは（古墳内外のものも、土城のものも）灰色で細席文がある。そして「木亭」といふ、製作者か製作地かを示す刻印をもつたものが十以上もあることが注目される。北沙城にはこの外に系統を異にする、つまりもつと古い時期の紅色の陶器もいくつか封土の中などにまぎれこんでゐた。陽高の十五號墓からは大小十二ヶの壺が出た。素地は灰陶系のものらしいが、これには黒漆の様な塗料がぬつてあるといふ。中の數ヶは、博山爐の蓋の様な蓋がある。

話せば際限がないが、この邊が發掘の結果のもつとも注目す

べきことであらう。陽高古城堡の本報告の完成の一日も早く、んことを望むとともに、今後、何人かの手によつて、この地方の古墳の調査が繼續せられ、われわれの知見を進めてもらふことを望んでやまない。

〔藤枝 晃〕